

日本海の後期第四紀火山灰層序

Tephrochronology of the late Quaternary Japan Sea sediments

池原 研[1]; Chun Jong-Hwa[2]

Ken Ikehara[1]; Jong-Hwa Chun[2]

[1] 産総研・海洋資源環境; [2] 韓国海洋研究院

[1] MRE, AIST; [2] KORDI

火山灰（テフラ）は同時間面としてコア間の対比に有効なのはもちろん、特に日本海のように CCD が浅く環境変動の影響が大きい場合、放射性炭素年代測定や酸素同位体層序が使いづらい場では、年代推定の道具としても有効である。ここでは、IMAGES 隠岐堆及び秋田沖の分析結果を示すと同時に、日本海から多数採取されているコアの再検討結果から、鬱陵島及びその周辺起源や白頭山（長白山）起源の火山灰について考察する。隠岐堆コアでは、深度約 56m までの間で 44 層のテフラを分析した。基本的に日本列島起源のものと鬱陵島系のものから構成される。秋田沖コアでは、深度約 33m までの間で 25 層の分析を実施したが、そのほとんどは日本列島起源で、わずかに白頭山系や鬱陵島系と考えられるものが存在する。隠岐堆コアの中部以深と秋田沖コアのほとんどのテフラについては既知のテフラとの同定がなされていないが、今後ほかの年代試料と相互チェックしながら同定を進めていく予定である。日本海南部から中部では鬱陵島系の、日本海北部では白頭山系のテフラが薄いながら多数存在することが明らかとなってきている。これらはほかのテフラの産出状況や暗色層との関係、微化石層序と複合することで、日本海のコア対比及び年代指標として有用であると考えられる。